

# 清末小説から 106

2012.7.1

アメリカ人宣教師の暦.....樽本照雄 1

《愛國小説 鴿》の原作 / 《拊髀記》の原作(補).....渡辺浩司 9

傅兰雅“时新小説”征文参赛作品考(二).....姚 达兑17

清末小説から 8 / 20

年刊『清末小説』第35号は、現在鋭意編集中です。例年通り刊行できるはず。ご期待ください

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## アメリカ人宣教師の暦

樽本照雄

日本、中国、アメリカという3カ国の人々は、新暦旧暦のふたつをどのように使用しているのか。本稿では、これを明らかにする。

### 旧暦と新暦

ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書

館について調べていたときだ。

新暦旧暦問題が生じて執筆が中断してしまった。問題は、アメリカ人宣教師が本部に送った書簡の日付に関係する。そこに書かれているのは新暦(グレゴリオ暦)なのか旧暦なのか。

暦の計算法とか、その成り立ちとか、いくつもある暦のそれぞれの違いとか、そういった複雑な問題ではない。もっと基本的で、かつ簡単なことだ。

当時は、日本、中国ともに旧暦を使用している。

日本では、明治五年十二月二日(1872.12.31)までが旧暦だった。新暦に切り替わるのは、明治6年(1873)1月1日からとなる。

中国では、宣統三年十一月十二日(1911.12.31)までが旧暦。翌日から中華民国元年(1912)1月1日である。

改暦までは、日本でも中国でもそこに住む人々は、当然ながら旧暦のもとで生活している。

以上のことを押さえておけば、さしあたって大きな問題はないだろう。

ところが、日本に滞在する、あるいは上海にでかけるアメリカ人宣教師がそこに加わると、見通しが悪くなる。最初は、そういう気がした。

さらに、日本人、アメリカ人宣教師が上海で辞書を印刷すると、刊年を英語でどう表示したか。中国人の編纂した英漢辞典はどうか。それらが重なって、判断するのにとまどった。

#### 上海の出版社のばあい

商務印書館は、英漢辞典を多数刊行している。そのなかのひとつに次がある。発行年月の表示を確認したい。

呉鼎奚若編纂『華英会話文件辞典』  
商務印書館 庚戌年八月初版、民国六年二月八版

初版の庚戌年は1910年である。「八月」は旧暦を意味する。ここまでは当たり前だ。

第8版にある英文の編者序は、その文末に「P.S.YIE. / August, 1910」と記入する。庚戌年八月が旧暦であるのをそのまま英語表示の1910年8月にしてしまった。表面の字面だけを機械的に変換している。西暦が新暦だという認識がないように見受けられる。

同書の別版を見る。

呉鼎奚若編纂、紹興馮蕃五訂正『(訂正)華英会話文件辞典』商務印書館 庚戌年八月初版、民国十四年二月十六版

こちらの『(訂正)華英会話文件辞典』奥付には、海賊版禁止の決まり文句のうしろにも記述がある。「此書有著作権翻印必究 / 前清宣統三年四月初三日稟部註冊五月十四日領到著字第一百四十六号執照」。この著作権登録表示に注目する。許可証著字第146号受領の日付が問題だ。「宣統三年五月十四日」は、新暦になおすと1911年6月10日に該当する。ところが、奥付の英語は「Copyright, May, 14, 1911, Certificate No. Chu 146」となっている。こちらも、宣統三年を機械的に1911年と書き換えただけ。旧暦の「五月十四日」をそのまま「May, 14」に翻訳する。まさか英語部分も旧暦だとは思わない。

以上の2例を見る限り、商務印書館は旧暦新暦の区別をつけていない。

同じ上海にあったアメリカ長老派教会の印刷所、すなわち美華書館ではどうか。商務印書館の創業者たちと深く関係していた印刷所だ。

日本人がわざわざ上海にでむき、この美華書館で辞書を印刷したことは、ひろく知られている。そのなかのひとつに、薩摩辞書というものがある。編者に薩摩学生と書いているのが俗称の由来だ。

第3版、第4版ともに、美華書館で印刷された。

第3版は、薩摩学生編『改正増補和訳英辞書』と称する。その「日本語序」には「明治二歳己巳正月」と書く\*1。旧暦である。ところが、英文序には年月をそのまま「January, 1869」と翻訳している。商務印書館のやり方と同じだ。

当時の日本と中国では、それでよかった。旧暦で生活しているのだから、わざわざ計算して新暦表示をする必要も感じなかっただろう。必要がないから区別するという認識もうまれない。西暦表示が新暦だと考えた私のほうが悪いことになる。旧暦の時代は、英語表示も旧暦である。

ところが、例外とっていいかどうか、つぎの辞書がある。

(岡田)好樹堂訳『官許仏和辞典』だ。こちら美華書館で印刷された。扉には「明治四年辛未正月」とある\*2。旧暦だ。ところが、フランス語序文ではフランス語で「1871年2月」と記載されているのではないか。たしかに、同年正月は、新暦になおせば2月19日から28日の期間に重なる。これは、旧暦と同時に新暦であるといっていい。例外的に正確な表記であると思う。

では、アメリカ人宣教師のばあいは、どうなっているのか。

#### 日本滞在中のヘプバーンのばあい

アメリカ長老派教会に属する宣教師のひとりヘプバーン (James Curtis Hepburn, 1815-1911。ヘボンで有名) は、当時日本において宣教と医療に従事していた。彼は、のちに自分の編集した辞書『和英語

林集成』を印刷するために上海に赴くことになる。

彼は、派遣された現地の状況を報告するためにアメリカ本部の責任者にむけて多くの手紙を書いた。それらは、高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店1959.10.30 / 1977.10.20二刷)にまとめてある。また、岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』(教文館2009.10.10)も刊行されている\*3。以下、ヘプバーン書簡の内容を紹介するときはページ数を示し、「全集\*頁」を末尾に追加する。

彼の書簡には、当時の日本でおこった事件などにも言及がある。そのなかのひとつが、生麦事件だ。

文久二(1862)年八月二十一日に事件は起こった。薩摩藩島津久光の大名行列が生麦村に入ったところ、乗馬のイギリス人4名(うち1名は女性)に遭遇する。薩摩藩士は、イギリス人が行列に乱入したことを理由に彼らを殺傷した。その負傷者2名の手当をしたのがヘプバーンだ。イギリス政府は江戸幕府に謝罪と賠償を要求する。薩摩藩にも下手人の処罰と賠償を迫る。幕府は賠償金を支払い、薩摩藩は拒否した。それが薩英戦争につながっていく。

ヘプバーン書簡は、報告であって新聞ではない。通信事情も異なるから時間差が生じる。

生麦事件に触れた手紙は、(1862年)十月四日付である(110頁、全集132頁)。そののちも何度か関連することを書いた。事件の推移を見ている。たとえば、幕府の賠償についてはこうだ。

(1863年)五月二十六日 わたしがお伝えできる最上のニュースは、今夕聴いた次の事柄なのです。過去数週間にわたり日本を覆っていた戦雲が、まったく除かれたことなのです。幕府はその能力の限度においてイギリスの要求に応じたのです。五、六十万ドルを支払っても、下手人を引渡すことはできないということなのです。この報道を今夕聴きました。イギリスもこれで満足することでしょうし、このように不吉な前兆に思われた事件も容易におさまってしまいました。134頁、全集152頁

ものの本によると、幕府が償金44万ドルを支払ったのは、同年旧暦五月九日(新暦6月24日)のことだ。ヘプバーン書簡の示す「五月二十六日」が新暦だとすれば、支払いの新暦6月24日は未来に属する。ありえない。もし旧暦だとすれば、五月九日にあったことを五月二十六日の手紙に書くことができる。

ここを見て、ヘプバーンは旧暦を使用している、と私はまず考えた。

また、生麦事件についての該書訳者注では、事件発生の日時を「文久二年(一八六二年)八月二十一日」(111頁、全集132頁)にしている。この「八月二十一日」は、旧暦である。ヘプバーン書簡の日付も旧暦であることを示唆しているように私には思えた。

ところが、そうではない例が多く出てくる。簡単なところをひとつ。

(1862年)十二月九日付の手紙は、数日にわたって書き継いだものらしい。文末附近に新年のあいさつが見える。

十二月二十七日 新年おめでとう。  
120頁、全集141頁

新暦でも旧暦でも年末は年末だ。「新年おめでとう」と書くのは不自然ではない。だが、それをアメリカで受け取る方ではどうか。もし「十二月二十七日」が旧暦であれば、新暦換算するとその時点ですでに2月14日なのだ。時期を失してはなはだしい。

七曜日が明らかになっているばあいは、それを手がかりにして月日を特定することができる\*4。

(1872年)七月二十二日横浜で書かれた書簡である。上海で『和英語林集成』第2版を印刷し、横浜に帰ってきた。

上海で仕事を無事完了し、二十日の土曜日、大喜びで帰浜いたしました。243頁、全集260頁

「二十日の土曜日」は、新暦の表記で間違いない。日本は旧暦であるにもかかわらず、ヘプバーンは新暦を使用している。

もう1例を示す。(1874年)一月三日付書簡につぎのような箇所がある。

御指示によりわたしどもは<sup>ママ</sup>本月二十三日、去る火曜日、江戸に集まり  
.....253頁、全集269頁



国立国会図書館ウェブサイトから 慶應二年 (1866) 柱暦

「去る火曜日」と書いている。「本月」にもかかわらず「去る」では矛盾する。

ここの「本月」は「先(十二)月」の誤りだろう。

たしかに新暦で12月23日は、火曜日にあたる。

ヘプバーンのばあいは、一部に旧暦を使用したような形跡を残しながら、やはり全体は新暦なのである。

もうひとりの宣教師を例にあげる。

当時、フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeek のちに改名して Verbeck, 1830-1898) は、長崎にいて一時期上海に避難したことがある。上海到着を次のように書いている。「一六日の土曜日にわたしたちは無事当地に着きました」(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社 1978.7.1. 76頁)。1863年5月16日はたしかに土曜日である。

### ふたつのこよみ

参考のため、日本で使われていた「柱暦」のひとつを示す。

柱に貼って見たものだという。これは複雑だ。よほど使い慣れている人でなければ読み解くのはむづかしい。旧暦だから月曜、火曜の七曜日は使用しない。その日の吉兆を知るために暦があった。そういう時間を当時の日本人は生活していた。

アメリカで使用していた暦のひとつを別に掲げた。

年月日と曜日が一目瞭然である。3地域に分けて日の出、日の入り、月の出、満潮などを細かく示す。ヘプバーンたちが使用したのがこの暦だ、というわけではない。アメリカでは同種の暦がいくつ



7th Month.		JULY, 1872.										31 Days.					
MOON'S PHASES.		D.	BOSTON.			NEW YORK.			WASHINGTON.			CHICAGO.			ST. LOUIS.		
			H.	M.	E.	H.	M.	E.	H.	M.	E.	H.	M.	E.	H.	M.	E.
NEW MOON .....		5	1	41	E.	1	29	E.	1	17	E.	0	35	E.	0	24	E.
FIRST QUARTER....		13	3	4	E.	2	52	E.	2	40	E.	1	58	E.	1	47	E.
FULL MOON .....		20	9	9	M.	8	57	M.	8	45	M.	8	3	M.	7	52	M.
LAST QUARTER.....		27	2	35	M.	2	23	M.	2	11	M.	1	29	M.	1	18	M.
D. of M.	Day of Week.	Boston, New England, N. Y. State, Michigan, Wis., Iowa, & Oregon.						New York City, Phila., Conn., N. Jersey, Pa., Ohio, Ind., and Ill.						Washington, Md., Va., Ky., Mo., and Cal.			
		Moon South.	Moon's Place.	Sun Rises. H. M.	Sun Sets. H. M.	Moon Rises. H. M.	High Water. H. M.	Sun Rises. H. M.	Sun Sets. H. M.	Moon Rises. H. M.	High Water. H. M.	Sun Rises. H. M.	Sun Sets. H. M.	Moon Rises. H. M.			
1	Monday	8 47	♍ 29	4 26	7 40	1 33	8 32	4 32	7 35	1 37	5 17	4 38	7 29	1 41			
2	Tuesday	9 34	♎ 11	4 26	7 40	2 4	9 22	4 32	7 35	2 8	6 8	4 38	7 29	2 13			
3	Wednesday	10 23	♏ 23	4 27	7 40	2 39	10 11	4 33	7 34	2 44	6 57	4 39	7 29	2 50			
4	Thursday	11 13	♐ 7	4 28	7 40	3 20	10 58	4 33	7 34	3 26	7 41	4 39	7 28	3 32			
5	Friday	EV. 3	♑ 17	4 29	7 39	SETS.	11 41	4 34	7 34	SETS.	8 23	4 40	7 28	SETS.			
6	Saturday	53	♒ 29	4 29	7 39	8 42	MORN.	4 35	7 34	8 37	9 8	4 41	7 28	8 31			
27) Sixth Sunday after Trinity.		♀ in ♏.										Day's length at New York, 14h. 58m.					
7	Sunday	1 41	♓ 10	4 30	7 39	9 19	21	4 35	7 33	9 14	9 49	4 41	7 28	9 9			
8	Monday	2 28	♐ 22	4 30	7 38	9 52	1 3	4 36	7 33	9 48	10 28	4 42	7 27	9 43			
9	Tuesday	3 13	♑ 4	4 31	7 38	10 20	1 44	4 37	7 33	10 17	11 7	4 42	7 27	10 13			
10	Wednesday	3 56	♒ 16	4 32	7 38	10 44	2 24	4 37	7 32	10 42	11 48	4 43	7 27	10 40			
11	Thursday	4 38	♓ 29	4 33	7 37	11 7	3 3	4 38	7 32	11 6	MORN.	4 44	7 26	11 5			
12	Friday	5 20	♐ 11	4 33	7 37	11 30	3 44	4 39	7 31	11 30	30	4 44	7 26	11 30			
13	Saturday	6 4	♑ 24	4 34	7 36	11 53	4 28	4 39	7 31	11 54	1 16	4 45	7 26	11 55			
28) Seventh Sunday after Trinity.		♂ in ♏.										Day's length at New York, 14h. 50m.					
14	Sunday	6 50	♐ 7	4 35	7 36	MORN.	5 17	4 40	7 30	MORN.	2 3	4 46	7 25	MORN.			
15	Monday	7 40	♑ 21	4 36	7 35	17	6 12	4 41	7 30	20	2 58	4 46	7 24	23			
16	Tuesday	8 35	♒ 5	4 37	7 34	47	7 15	4 42	7 29	51	4 0	4 47	7 24	55			
17	Wednesday	9 35	♓ 19	4 37	7 34	1 24	8 18	4 43	7 29	1 29	5 2	4 48	7 23	1 24			
18	Thursday	10 40	♐ 4	4 38	7 33	2 10	9 23	4 44	7 28	2 16	6 9	4 49	7 23	2 22			
19	Friday	11 46	♑ 19	4 39	7 32	RISES.	10 27	4 44	7 27	RISES.	7 13	4 50	7 22	RISES.			
20	Saturday	MORN. 5	♒ 5	4 40	7 31	8 10	11 26	4 45	7 26	8 4	8 9	4 51	7 21	7 58			
29) Eighth Sunday after Trinity.		♂ in ♐.										Day's length at New York, 14h. 40m.					
21	Sunday	51	♓ 20	4 41	7 30	8 53	EV. 19	4 46	7 26	8 48	9 6	4 52	7 21	8 44			
22	Monday	1 51	♐ 5	4 42	7 30	9 26	1 13	4 47	7 25	9 23	9 58	4 52	7 20	9 20			
23	Tuesday	2 47	♑ 19	4 43	7 29	9 56	2 2	4 48	7 24	9 54	10 44	4 53	7 19	9 52			
24	Wednesday	3 39	♒ 4	4 44	7 28	10 21	2 47	4 48	7 23	10 20	11 31	4 54	7 18	10 20			
25	Thursday	4 27	♓ 17	4 45	7 27	10 46	3 33	4 49	7 23	10 46	EV. 19	4 55	7 18	10 47			
26	Friday	5 13	♐ 1	4 46	7 26	11 10	4 21	4 50	7 22	11 12	1 8	4 56	7 17	11 14			
27	Saturday	5 59	♑ 13	4 47	7 25	11 27	5 12	4 51	7 21	11 30	1 57	4 57	7 16	11 33			
30) Ninth Sunday after Trinity.		♂ in ♐.										Day's length at New York, 14h. 28m.					
28	Sunday	6 45	♑ 26	4 48	7 24	MORN.	6 7	4 52	7 20	MORN.	2 53	4 58	7 15	MORN.			
29	Monday	7 32	♒ 8	4 49	7 23	6	7 4	4 53	7 19	11	3 49	4 58	7 14	15			
30	Tuesday	8 20	♓ 20	4 50	7 22	39	8 0	4 54	7 18	44	4 45	4 59	7 13	50			
31	Wednesday	9 9	♐ 2	4 51	7 21	1 18	8 57	4 55	7 17	1 24	5 41	4 59	7 12	1 30			

も発行されていた。だから、類似の暦を使っていたのではないか。アメリカ人宣教師たちが、宗教行事をおこなう時に新暦が必要となる。日本で日曜学校を開くにしても、いつが日曜日なのかを知らないから。

では、中国にいる宣教師はどうか。

中国のアメリカ人宣教師のばあい

アメリカ人宣教師のひとりが、当時の中国から発信した記録がある。

『中国への宣教師ウォルター・M・ラウリー師の思い出 Memoirs of the Rev. Walter M.Lowrie, Missionary to China』(NEW YORK:Robert Carter & Brothers, 1850。内容が異なる次の版本を使用する。PHILADELPHIA:Presbyterian Board of Publication,1854。電字版)は、ラウリーの書簡集だ。彼は中国で海賊に襲われ若くして死亡した。該書は、息子を悲しみ記憶するために父親が編集刊行したもの。その父とは、ある時期、ヘブバーン書簡の宛先人であるウォルター・ラウリー(Walter Lowrie, 1784-1868)だ\*5。

ラウリーが1845年に中国国内を移動したときの手記に注目する。そこから、日付と曜日を示す箇所だけを抜き出して日本語でまとめて示す。

3月30日<sup>ママ</sup>土曜日 / 4月1日火曜日 /  
4月2日水曜日 / 4月3日木曜日 /  
4月4日金曜日 / 4月10日木曜日 /  
4月11日金曜日...以下略 251-  
254頁

3月30日は、日曜日が正しい。書き間違っただけ。ついでに言えば、旧暦三月に三十日は存在しない。二十九日までだ。ラウリーが書き留めた日付は、すべて新暦表示となっていることがわかる。

ラウリー書簡集の初版には、墓石に刻んだ漢語が該書末尾に収録されている。

「耶穌教師亜美理駕花旗国人ノ婁礼華先生生于ノ嘉慶二十四年正月廿六日。卒于ノ道光二十七年七月初九日。(後略)」

ラウリーの漢字表記が婁礼華だ。墓石の正面には、生卒年をそれぞれ1819年2月18日、1847年8月19日としている。漢語が刻まれているのは、その墓が中国寧波に置かれたからだ。漢語は旧暦、西暦は新暦と区別する。卒年の新暦旧暦の換算はただしい。だが、生年の新暦2月18日は旧暦の正月廿四日だ。間違っただけ。理由はわからない。ただし、ここには新暦と旧暦を区別しようとする姿勢があることを理解する。

ネビアス夫人(Helen S.Coan Nevius)著『ジョン・リビングストン・ネビアス伝 THE LIFE OF JOHN LIVINGSTON NEVIUS: FOR FORTY YEARS A MISSIONARY IN CHINA』(Fleming H.Revell Company, 1895。電字版)からも日付と曜日をいくつか抜き出す。

1850年6月2日日曜日 / 1855年12月  
8日土曜日 / 同年12月14日金曜日 /  
同年12月18日火曜日

1850年はアメリカで、1855年は中国で記録された。ネビアスも同じく新暦を使

用していた。これは、予想された結果でもある。

以上を見た上での結論らしきものは、こうだ。

日本と中国では旧暦を使用していた時代に、アメリカ人宣教師たちは現地に住む人々とは別の新暦によって生活していた。

もっとも、それぞれで異なることもある。たとえば、中国の小説雑誌が民国以後も発行年を旧暦で表示する例もないではない。実物に応じて判断しなければならないだろう\*6。常識的なところに落ち着いた。

罫

(本稿は、2012年1月13日研究会ウェブサイトに掲載した文章にもとづいて書き直した)

#### 【注】

- 1) 国立国会図書館近代デジタルアーカイブ
- 2) 国立国会図書館近代デジタルアーカイブ
- 3) 別に私信を集めた高谷道男編訳『ヘボンの手紙』(有隣堂(新書)1976.10.10)がある。ただし、『ヘボンの手紙』は全集には未収録。こちらは本稿では使用しない。
- 4) 新暦旧暦の換算は次を使用した。薛仲三、欧陽頤合編『兩千年中西曆对照表』三聯書店1956.2 / 台湾・華世出版社影印1977.3
- 5) 父ラウリー(Walter Lowrie, 1784-1868)には、8人の子供がいた。次の3人は宣教師になった。長男ジョン(John Cameron Lowrie, 1808-1900)、三男

ウォルター(前出 1819-1847)、五男ルーベン(Reuben Post Lowrie, 1827-1860)だ。『ヘボン書簡集』の44頁注2では、息子であるルーベンについて「北米長老ミッション本部の総主事ラウリー博士の弟でもある」とする。間違いだろう。そのゆえかどうかはわからないが、全集51頁では、この注釈2は全文が削除されている。部分的な訂正ですむ、と私は思うのだが。

- 6) 参考までに、時代がさがって1880年代のはじめころのこと。岸田吟香が上海に薬局樂善堂を開いたとき、広告をかねて新旧暦併用のカレンダーを配布した、との紹介がある。陳祖恩「文化商人岸田吟香」『尋訪東洋人 近代上海的日本居留民』上海社会科学出版社2007.1。67-70頁。陳祖恩著、大里浩秋監訳「第5章文人商人・岸田吟香」『上海に生きた日本人 幕末から敗戦まで』大修館書店2010.7.10。81-85頁

張俊才、王勇著

『頑固非尽守旧也：晚年林紘の困惑与堅守』

太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社  
2012.1

引 言 晚年林紘：一個複雜的存在

第1章 “五四”林紘的“滑鉄盧”

第2章 晚年林紘的政治絶望

第3章 晚年林紘的文化憂思

第4章 晚年林紘の文学焦慮

第5章 重評語誌新旧思潮之爭

結 語 晚年林紘：一個文化保守主義者

参考文献、後記



《愛國小説 鴿》の原作 /  
《拊髀記》の原作(補)

渡 辺 浩 司

1

《小説大観》第五集(上海文明書局,1916年3月 - 上海書店/江蘇広陵古籍刻印社1990年6月影印本を使用,出版社と発行年は表紙による,発行月は『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編,2011年3月31日)による)に、《愛國小説 鴿》なる短篇作品が掲載された。次行に“英國赫洛德司的温司著”、“甦漢譯述/天虚我生潤文”とあり、翻訳であることはわかる。

その原作等が判明したので、本稿で報告する。

原作は、『Schmitt's Pigeons』、原作者は、Harold Steevens、掲載誌は、『The Strand Magazine』Vol.51-No.303(George Newnes,1916年3月)である。

原作者のHarold Steevensは、未詳。Strand 誌には時々作品を発表しているが、イギリス人かどうか不明である。1904年頃のイギリスに同姓同名の新聞記者がいたらしいが、同一人物かどうかは不明\*1。

訳者の甦漢についても未詳。訳文に手

を加えた天虚我生は、本名・陳栩、原籍は浙江錢塘、1878或1879年生、1940年没、数多くの著作があり、雑誌編集や会社経営もこなしていた。

2

『Schmitt's Pigeons』は、第三者が少し昔を振り返る感じで書かれている。あらすじを述べる。

Hans Kultur Schmittが刑務所内で自殺したことは、少しだけ話題になった。但し、検閲のため、わずかの事実しか公にされなかった。その事実とは以下の通りである；Schmittは午前11時にRamcaster駅で逮捕され、12時に刑務所に収容された；12時45分、看守が食事を運んだ時、頭部が折れ曲がった彼を見つけた；診療所員によると、複雑骨折で頭の一部がつぶれていた；どうやら壁に突進し、ぶつけたためのようだった。

この自殺はすぐに忘れられてしまった、なぜなら敵の大規模な航空部隊の壊滅という大事件があり、人々の多くが安心と喜びで他のことを考えなかったからである。

Schmittの自殺をこの大事件に結び付けて考える人はほとんどいないだろう。敵がどのように大規模な航空部隊を組織したのかは今日まで不明であるし、今後謎のままだろう。クリスマス週間の穏やかな時期に、敵の飛行船と飛行機が我が国を攻撃しようとやって来たという事実が残っている。彼らは10列になり、3分間隔で次々と後に続き、百機の飛行船と伴走する数百の飛行機が北海を越えて

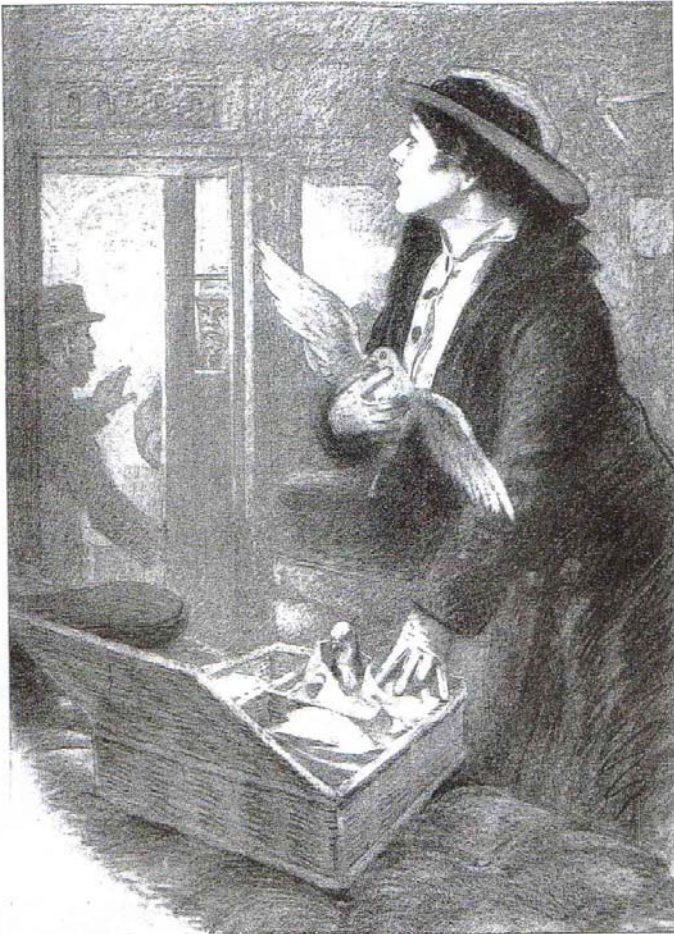
我が国に向かっていた。漁師によると、彼らが途中まで進んだ時に、南西からの突風に襲われ、混乱し、それに続く猛烈な強風のために、あつという間に北極の方へ吹き流されていったとのことであった。1917年にSkevigsenが北極から帰って来た時に、彼らの最期を少し聞けたくらいで、それが無ければ、最後の審判の日まで何もわからなかったであろう。

その日の朝、Mrs.Gondula Egertonは、海軍士官である夫に会うために、北へ向かっていた。その列車はスコットランド人でいっぱいだったが、ファーストクラスは人がまばらだった。彼女はコンパートメントに入り、誰も入らないよう荷物を周りの席に広げていた。だが、バスケットを持った紳士が入ってきた。男はホームの端から端まで歩いたけれど、コンパートメントにはすべて人がいたので、無造作に彼女の所を選び、怒った様子で入ってきた。彼は窓側に座り、彼女は男からできるだけ距離をとろうと向かいの通路側に座った。

外は南東のそよ風が吹き、すがすがしい朝だった。船乗りの妻として、海の天気がよければ彼女は十分に満足で、更に、戦局を乗り切っている夫に会えるというので、うれしさいっぱいだった。彼女は気持を落ち着けるため、雑誌を読み始めた。しばらくして、彼女は、相席の男が自分と窓の間に置いているバスケットの上にナプキンを広げ、サンドイッチを食べているのに気付いた。彼女は、変な時間に、そして義務として食べているように思った。男は35歳くらいで、ツイード

を着て引き締まった身体をし、泥炭のような臭いをしていた。食べ終わると、男は窓を開け、ナプキンを払った。彼女はそれを見て、細かすぎるので男の奥さんがかわいそうだ等と思い、雑誌に目を戻した。またしばらくして、Blackingtonまで30分の所 全行程の半分まで走った所で、男がまたサンドイッチを食べているのに気付いた。さきの食事から1時間も経っていないのに、食欲が抑えられないのか、戦時なのにどうしてこんなことができるのか、信じられない等と思い、彼女は気付かれないように観察した。開いたバスケットにナプキン、同じ光景だった。男が立ち上がった時、窓からの風がナプキンの端を持ち上げた。その時、彼女は鳥の尾を見た、生きたハトのそれだった。

彼女が走行中の列車からハトを放すべきではない等と考えていると、列車はBlackington駅に到着した。男は荷物を置いたまま下車し、電報室の方へ行った。彼女は少しためらったが、スパイの悪行やそのために戦死した夫の同僚の話を聞いていたので、この間にバスケットを調べようと決心し実行した。バスケットを開け、ナプキンをどけると、2羽の美しい伝書鳩がいた。2羽は区切られた場所にそれぞれおり、他に空の場所が2つあり、またサンドイッチと思われる包みがあった。彼女は興奮して密書があるかを探ろうと1羽に触った。ハトの方は、閉じ込められていた所に、不慣れな手で触られたため、羽をバタつかせた。すると、もう1羽も動き出し、2羽とも激しく暴れ



"THE MAN STEPPED FORWARD TO JUMP IN, BUT A STENTORIAN CHORUS OF 'STAND AWAY, THERE! DETERRED HIM.'"

始めた。彼女はハトを抱えて懸命に押し込もうとしながら、男が電報の封筒を持って戻って来るのが見えた。男が乗車しかけた時、車両の接続があり、ホームに留まった。彼女はその間にハトを無理やり詰め込み、ふたを閉めた。男は席に戻ったが、何も気付かなかった。列車が走り出し、もう1人恰幅のいい客が入って来て、彼女の向かいに座った。男は新しい乗客を注意深く見ただけで、彼女の方は見ず、全く疑っていなかった。彼女は男がスパイだと確信していた。男は電報を細かく破り、外にばらまいた。

彼女は、これ以上スパイ行為をさせずに男をどう捕えるか等を熟考し、新しい乗客が見張り代わりになるので、車掌に相談しようと思われ、その車両に向かった。車掌は、男を見に行く、次の駅で軍警察に連絡する等と言われ、彼女は戻った。戻ってみると、男と新しい乗客が親しく話しており、男は窓の外でナプキンを払っていた。彼女は遅かったと思われ、自らの失敗に落胆したが、もう失敗はしないと直し、勇気を奮い起こした。車掌が検札を理由に現れた。男は車掌の態度に何か気付いたようだったが、車掌が去ると、満足そうに目を閉じていた。外は太陽

が隠れ、風向きが変わっていた。列車は速度を落とし、車掌が隣のコンパートメントに入った。停車すると、銃を持った兵士たちが走ってきて、ドアの所に集まった。男は逃げようとしたが、彼女の声で入ってきた兵士たちに捕まり、バスケットと共に駅長室に連行された。彼女も同行した。男はとても落ち着いており、彼女がバスケットのハトのことを話した時も、微笑を含んで彼女を見ただけだった。

軍曹がハトを持ち上げ、密書を調べた。すると突然、男は声を上げ、ハトに向かって突進した。そして、驚いた軍曹から

ハトを奪い、開いた窓の方に飛ばした。彼女は、男がハトを見た時、顔色が変わるのを見ていた。彼女は男の行動を予知し、急いで窓を閉めた。ハトはガラスにぶつかり、床に落ちた。男は狂ったように暴れたが、軍曹らに取り押さえられ、その表情は絶望に変わった。

そのハトの密書を解読すると、「都合悪し」というもので、なぜ男が突然暴れ出したのかは不明だった。その後、すぐに男が獄中で自殺したため、謎を解明する機会は失われた。

その後の調査で、男はもとの名を Hans Kultur Schmitt、イギリスに帰化し、Andrew Graham Malcolmson と名乗り、有名な伝書鳩クラブの会員だった。男の最近の活動は、敵国の空軍とつながっており、気象予報と無線電信が禁止されて以降、イギリスと大西洋近海の気象情報を報告する義務を負っていた。そのため、アイルランドの海岸地帯に配置した部下たちから電報を受けていた。そして、高度に訓練された伝書鳩を、オランダの海岸に設置されたハト小屋に飛ばしていた。

Mrs.Egertonには男の情報が知らされたので、翌日の敵の航空部隊の失敗のニュースとの関連が理解できた。つまり、男が Blackington 駅からの出発後に放したハトは間違っていたのである。男がなぜ大失敗を犯したのか、彼女は次のように考えた；Blackington 駅でバスケットを調べ、暴れたハトを押し込んだ時、たまたま2羽の位置が入れ替わった；男はそれに気付かず、駅を発車した後に「都合悪し」のハトだと思い込んだもう1羽

を放した；逮捕後、Ramcaster 駅でハトを見て、誤りに気付き、突然暴れ出し、ハトを放そうとした。その失敗からの大損害を聞くには耐えられず、男は死を選び、その後、本当に、敵の大規模な航空部隊が現われ、そして消えていった。

Mrs.Egertonはこの功績で、大変な栄誉の功労賞のメダルを授けられた。

まだ小型無線機が無い時代、軍属の一人女性の活躍で、伝書鳩を使ったスパイを見破り、イギリスが大空襲を免れる物語で、一方では、失敗したスパイだけでなく、大規模飛行部隊の乗員たちが命を落す話にもなっている。

### 3

中国語訳について述べる。他に訳されていた時の原作探しの参考にできると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Hans Kultur Schmitt	痕司 卡爾德 希米脱
Mrs.Egerton	愛格登夫人
Blackington	培蘭根敦
Ramcaster	萊卡司德

内容は物語どおりしっかり訳していると思う。ただ、“潤文”の影響かも知れないが、省略が散見される。省略が目立つ箇所を挙げる。スパイが捕まり、バスケットのハトを調べた後の場面である。

“No doubt about that, sir,”he said,

addressing the stationmaster.

Telling the story in the sergeants' mess that night, he said: "I tell ye, mates, it was like as if I had touched off a mine."

A very appropriate simile, for, with explosive suddenness, the spy gave vent to a sound which was neither roar nor bark, but both in one, combining as it did the volume of the former with the piercing sharpness of the other. At the same instant he sprang for the pigeon, knocking his astonished guards to right and left.

The wild-beast ejaculation must momentarily have paralyzed the sergeant's motor nerve centres; he lost hold of the pigeon the spy had it. The sergeant recovered himself in a jiffy, spun round as the man plunged past him, and flung his arms round his waist. It was too late. The spy's arms were still free; dropping his right hand, he swung it forward, and, before anybody could stop him, launched the bird straight towards the open window.

The sergeant shouted, but that did not stop the pigeon.

Mrs. Egerton alone had kept her eyes fixed on the spy's face; she knew already what was in the basket, and the psychology of the man fascinated her. Thus, she alone had seen his face change when he caught

sight of the pigeon; saw the ecstatic calm give place in the twinkling of an eye to terror and desperation; and she, with a woman's lightning wit, divined his intention when he sprang.

Without waiting for anything else that might happen, she ran to the window and slammed it shut none too soon, for as the sash closed the magnificent bird, speeding like an arrow for its element, dashed against the glass and fell to the floor.(314頁右)

(「それについては間違い無しですな」彼(軍曹)は駅長に告げた。

その夜、軍曹たちの食事会でその話をした時、彼は「いいかい、みんな、私は機雷に触れたのかと思ったよ」と言った。

とても適切な喩えだった、暴発したかのようにスパイは声を発した、その声はうなるのでもなく、吠えるのでもなく、その両方、前者の音量にもう一方の突き刺すような鋭さを混ぜたものであった。同時に、男は、驚いた兵士らを左右に突き飛ばし、ハトに飛び掛かった。

野獣の突然の叫び声は、軍曹の運動神経の中枢を一瞬、麻痺させたにちがいない、彼はハトを手放し　スパイがそれを受けた。軍曹はすぐ我に返り、男が駆け抜けて行った方を向き、男の腰に抱きついた。それは遅すぎた。スパイ

の両手はまだ自由だったので、右手を下げて、前の方に振った。そして、周りが止める前に、開いた窓に向かってハトをまっすぐ放り出した。

軍曹は叫んだが、ハトは止まらなかった。

Egerton夫人はただ一人、スパイの顔を注視していた、彼女はすでにバスケットの中が何かを知っており、男の心理状態の方に注意していた。それ故、彼女一人が、男がハトを見た時、その顔が変わったのに気付いていた、満足して落ち着いた表情から目に恐怖と絶望の光が現れたのを見たのである。そして、男が跳び上がった時、彼女はその意味を稲妻のようにすばやい女性の機転で察知した。

何が起こるのかを待つ間も無く、彼女は窓へ駆け寄り、ピシャリと閉めた。ほどなく、閉まった窓へ向かって、立派なハトが、持ち前の速度を矢のように上げた、そしてガラスにぶつかり床に落ちた。)

乃語站長曰：“噫、是無所用其疑矣。”

此語出。少年已撲隊長。立攬其鴿。隊長緊抱其身。而少年手中之鴿。已向窗外而放。讀者當知此時惟愛格登夫人一人。專心一致於少年。靚少年忽忽凝思之狀。即已早會其意。則立閉其窗。鴿乃撞窗而仆。(8

頁,句読点は原文のまま,コロン・引用符は補った)

(そこで(隊長は)駅長に「ああ、疑問の余地は無いですね。」

この言葉が話されると、若者は隊長を殴り、すぐにハトを奪った。隊長は男にしっかり抱きついたが、若者の手のハトはすでに窓の外へ向かって放たれていた。読者の皆さん、この時、愛格登夫人一人だけが若者に特に注意を向け、若者が突然考え込む様子を見て、すぐにその意味がわかったのです。そして、すばやく窓を閉めた。ハトは窓にぶつかり落ちた。)

クライマックスであるが、中国語訳は大部分が省略され、全く面白さを感じない。また、スパイを“少年”としているが、35歳ぐらいでもそうなのかと思ってしまった。

#### 4

スパイの名前「Hans Kultur Schmitt」からドイツを敵国と見なしているのは明らかかなようだが、原作は「Germany」類の言葉を一切使わず、「Hun」という単語が1か所(306頁左)見えるだけで\*2、敵国がどこなのかを曖昧にしている。原作者が「Germany」を使うのさえ忌み嫌ったからであろうか、或は、物語の展開に無理がある(伝書鳩に危険が伴うのに、なぜ走行中の列車からハトを放すことになったのかの説明が無い; 伝書鳩はそもそもその帰巢本能を利用するのだから、オランダの海岸の

ハト小屋で訓練 ハトをイギリスに持ち込む  
密書を付けて放す、という順序になるはず  
だが、誰がいつ訓練して、誰がいつ持ち込んだ  
のかの説明が無い等)のをぼかすためなの  
か、不可思議な所である。ただ、後者の  
方は、軍用の伝書鳩で、スパイと同様の  
特殊な訓練を受けているから可能なの  
かも知れない。

なお、信じ難いことに、原作掲載誌と  
翻訳掲載誌の発行年月が同じ1916年3月  
となっている。Strand誌入手(航空便も無  
く、伝書鳩に運ばせることもできないので、  
英国から中国までは時間がかかるであろう)  
作品読了・選択 翻訳 修辞 小説大  
観誌掲載、という過程が極めて短い間に  
進められたことになる。故に、この翻訳  
からは、最新の欧州情勢を反映した作品  
を中国にすばやく取り込もうとする姿勢、  
他の小説雑誌に先んじようという気概が  
窺えるようである。

### 【注】

1) National Library of New Zealandのホ  
ームページで公開している現地の日  
刊紙『The Feilding Star Oroua and  
Kiwitea Counties Gazette』1905年1  
月4日の「“Hustle”」という記事  
中に、「Mr.Harold Steevens, a well  
known newspaper correspondent」と  
あり、イギリスの日刊紙『Daily  
Express』の記事を引用する。

2) 以下の通り。

At twelve, after a brief examination,  
in which he took no active part, he  
was safely lodged in the most

commodious cell (being a Hun) which  
the jail afforded.(306頁左)

(12時、短い取調べがあり、そこ  
では男は何ら動きを示さなかった、  
後、男は刑務所が提供した最も広  
い独房(ドイツ人として)に何事も無  
く収容された。)

### 【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞  
典》浙江古籍出版社,1993年5月

裴效維“陳蝶仙”-馬良春、李福田総主  
編《中国文学大辞典》第5巻,天津人  
民出版社,1991年10月

National Library of New Zealand「Papers  
Past」(HP)

[http://paperspast.natlib.govt.nz/cgi-  
bin/paperspast](http://paperspast.natlib.govt.nz/cgi-bin/paperspast)(2012年3月28日確認)

### 《拊髀記》の原作(補)

本誌前号掲載の拙稿「《拊髀記》の原  
作」において、呉禱訳《拊髀記》の原作  
が、押川春浪『巴里奇談 老愛國者』で  
あることを明らかにした。

その後、『老愛國者』が他にも翻訳さ  
れているのを見つけたので報告する。

・道《老将愛國談》,《愛國英雄》下  
編所収,未見 于潤琦主編《清末民  
初小説書系・愛國卷》中国文聯出版  
公司,1997年7月/同年11月第2次印刷,

所収を使用

- ・ 竊名《老将愛國談》，胡寄塵編《小説名畫大觀》文明書局・中華書局，1916年10月，所収 書目文献出版社，1996年7月，影印を使用

訳者名の有無の違いはあるものの、両者は同一である。

《愛國英雄》下編の出版年月について。使用した《清末民初小説書系・愛国巻》は短篇小説集で、明記していないが、大体は発表順に作品が並んでいる。この《愛國英雄》は、上編(中国を舞台にした作品集)及び下編(海外を舞台にした作品集)ともに、究竟《情歎仇歎》(《小説時報》第30号，1917年2月)と劉慎徳《丹心拌死戀蒼生》(《復旦雜誌》第4期，1917年7月)の間に置かれている。したがって、根拠は不明だが、編者は1917年2 - 7月発行だと考えていたようである。

更に初出の雑誌があるかも知れないが、両者ともに《拊髀記》(《小説月報》第4巻第3号，1913年7月25日)よりは後の発表であると思われる。

訳者“道”について。《清末民初小説書系・愛国巻》に引用する《愛國英雄》下編に、“道”の作品が、《黒衣隱士》《磨坊主人》《老将愛國談》と3作連続している。この中で、《磨坊主人》は、《小説月報》第三巻第九号(商務印書館，1912年12月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二巻十二期止》を使用，影印本は奥付が無く，発行年月日は『清末民初小説目録 第4版』による)にも掲載され、書名《歴史小説 磨坊主人》の下に“周瘦鵑”とある。故に、“道” = 周瘦鵑と考

えられる。周瘦鵑は、原籍が江蘇呉県、1895年生、1968年没、作家・翻訳家・雑誌編集者として活躍した(- 裴效維執筆“周瘦鵑”(馬良春、李福田総主編《中国文学大辞典》第6巻，天津人民出版社，1991年10月))。ただ、先に発表されたと思われる小説月報誌で、本当の姓“周”と字“瘦鵑”を名乗り、後出と思われる《愛國英雄》下編で、“道”という筆名に改めたのは不思議な感じがする。

翻訳の内容について。物語の流れは原作どおりだが、しばしば改訳がある。三点挙げておく。ベルナアを“佛安民”とし、アリーアは訳されず、“少女”とのみ書かれる。ベルナアによる往時の回想ではなく、“去歳八月”(去年八月)のこととする。結末は大佐の死で終わっており、直後の孫娘の自害と現在に話を戻す部分は省かれている；また、結末ではないが、大佐の息子(孫娘の父)の戦死も省いている。

で、ベルナアが佛安民になるのは、後出と思われる本作が一見して《拊髀記》と同内容だとわかるのを避けるためであろう。

について、老大佐の死だけで終わらせたのは、やはり不可解である。このために、翻訳の出来は《拊髀記》より劣ると言わざるを得ない。 罫



## 傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考

## (二)

姚 达 兑

## 一、朱正初

所著《新趣小说》八回（《清末时新小说集第四册》），获第十二名，奖金三元半。朱正初将《新趣小说》一书寄至上海参加傅兰雅的“时新小说”征文比赛，比赛的截稿日期为1895年9月18日，三个多月后，该书被扩写、易题为《新辑熙朝快史》在香港出版。

朱正初，字旭楼，号六泉山人、又号饮霞居士，生于1831年，同治五年举人，浙江湖州安吉人（现有史料皆称朱正初为安吉人，实际上并无更多的材料证明他来自何处，只知他避难至此。未有更多证据前，姑且存之）。

（一）、朱正初与后来的西泠印社首任社长吴昌硕的关系非同寻常，亦师亦友，常有诗文相互酬答。朱氏身世坎坷，曾任太平天国石达开幕僚，后来逃离太平军军营，避难于安吉，从而与吴昌硕相识，并接受吴氏所邀长住安吉芜园\*1。朱正初比吴昌硕大十三岁\*2。吴氏生于1844年，故而朱氏应是生于1831年。十九世纪五十年代末，清军和太平军在江浙一带的战争，

对朱、吴两氏身世大有影响，两人亲睹生灵涂炭，皆是极厌战乱。朱正初至安吉后，住安吉南北庄尺五村，以住所附近六泉山为号，故名“六泉山人”。朱氏有诗自叙云：“桃州（引注：唐高祖武德四年置桃州，安吉属古桃州）佳胜在东南，地处蓬莱尺五天。绿水绕村村隔水，青山挡路路环山。\*3”在芜园之时，朱正初与吴昌硕诗人相得，常是吴氏作画，朱氏作诗题字。这段经历，朱正初录入了其文《芜园记》中\*4。实际上，吴昌硕自称“三十学诗”，那时正是向朱正初和钱铁梅等人学习的，三人朝夕唱和，情深谊笃，后来钱铁梅写诗自比为“岁寒三友”\*5。钱诗且录如下，“苍松翠竹老梅桩，不合时宜人笑狂。把酒芜园皆自得，岁寒三友乐无疆。\*6”

吴昌硕《缶庐集》中有几首诗是写给朱正初的，兹录如下。（1）、和六泉山人朱正初 铜岭关头独往还，六泉门径久萧闲。青萝补屋宜藏月，红叶漫天坐看山。两地牵怀儿女小，一身行迹鬓毛斑。劝君莫动思乡念，来共芜园屋数间。

（案：此为朱氏别后，吴氏诗人相忆，牵惹肠，劝其再次归来，共隐芜园。）（2）、寄六泉山人 河西西向广苔长，闻道朱云姓氏香。落叶钟鸣新乐府，黄花灯影古重阳。愁来拔剑断流水，归去看山眠草堂。百不如人何碍老，知君赢得是清狂。

（3）、怀人诗 入世何妨狂是醒，不如归去让先生；六泉山下涓涓水，洗得诗肠彻底清\*7。以上三首，道出朱正初高洁遁世，以诗书自娱，颇有隐士之风。同治十一年（1872）春，友人邀请朱正初赴山东以恩贡候补县教谕，朱氏拒绝不去\*8。吴昌硕几首诗中指出朱氏有隐士高格，原

因在此。吴氏录请朱正初正和的诗作，还有不少，有的未曾收入集中。两君往来的诗书、诗画题签诸作，也可作证明两君交谊非比寻常。

(二) 朱正初的《新趣小说》和西泠散人的《熙朝快史》

在《清末时新小说集》的所有参赛作品中，最大的谜或许是第一名作品——何去何从和原作如何，而最引人注目的，却反是第四册朱正初的《新趣小说》。傅兰雅求征的小说为“时新小说”或“新趣小说”，朱氏这部作品题为“新趣小说”，所以近乎是无题作品，那么，又何以说它最为引人注目呢？熟知傅兰雅征文比赛此段公案的读者，应该熟知韩南先生曾撰大文，剖切详明地分析了两部未参赛但出版了的“时新小说”——即《熙朝快史》和《花柳深情传》。其实，《熙朝快史》一书，即为朱正初提交参赛的作品《新趣小说》的修订版。

鉴于修订版《熙朝快史》的修改幅度较大，而且在香港而不是在上海出版，我们或可相信，原作者和修订者是两人。樽本照雄先生《新编增补清末民初小说目录》中《熙朝快史》一则载，“盐官侠君氏校正、饮霞居士编次，西泠散人校订。首有光绪乙未（1895）冬至后一日西泠散人序。<sup>\*9</sup>”韩南先生曾论此书“序言提到了作者，却没多说什么，这暗示了西泠散人本人就是作者。<sup>\*10</sup>”事实上这种推测还未确证，我们并没有证据证明西泠散人确是饮霞居士。但是，很明显的是，饮霞居士即是朱正初。晚清出版物中，同样署名著者为“饮霞居士”的作品，还有《绘

图异想天开》，该书石印本十二回二册，光绪二十二年（1896）由上海书局出版<sup>\*11</sup>。同样署名著者为“西泠散人”的作品，还有《谜语采新》（1896年有手抄本）一卷，于光绪二十九年（1903），由上海知新书局出版，乃石印袖珍本，该书采辑有灯谜三百则<sup>\*12</sup>。关于“西泠散人”，我们还知道，他为在上海重印的明代小说《七十二朝四书人物演义》写有序言，序末题签有“岁庚辰秋仲西泠散人题于醇音居”<sup>\*13</sup>。庚辰秋仲，即是1895年秋天，而该书于光绪丁酉年（1897）由上海十万卷楼出版。以上列举说明了，同时间段存在的“饮霞居士”和“西泠散人”应该是两人，而非一位作者采用了两个笔名。

朱正初为傅兰雅小说征文所写的参赛作品凡八章，该作品被大幅度修改，八章变成了十二章，附加一序，由香港起新山庄出版，计有石印袖珍本四册<sup>\*14</sup>。《清末时新小说集》第一册卷首之前，附有朱正初寄稿之时用的信封彩页影印件。该信封贴有上海工部书信部邮票一枚，朱氏寄稿之时，或许便已身在上海。

朱正初的原著《新趣小说》被西泠散人修改成《熙朝快史》，结构有别，内容和主旨也变化很大，现略举几端如下。

(一) 迷信。韩南先生曾推测道，“虽然《熙朝快史》是一部写得很好的作品，且充分抨击了‘三弊’，但它却不一定能从傅兰雅那里获奖，因为他肯定会反对它对梦兆和转世再生的运用。<sup>\*15</sup>”实际上，朱正初的原稿获奖了，虽排名不前，也属可喜，这说明了这部小说在一定程度上已经抨击了三弊。韩南先生提及的“梦兆”和“转世再生”，指的是孝廉梦中闻老人

说喻世弊三等（鸦片、时文和缠足），以及梦中老人道出了孝廉寿命已尽，将转世为康济时（字黼清），辅助清廷改革，改造社会，并扫清敌氛。“梦兆”和“转世”两事，乃原著所无。原著中孝廉即是叙述者，是觉醒后闭门谢客专心著书的作者（孝廉者，即自隐朱正初举人的身份也）。

（二）时事。朱正初原著八回，稍作删改后，变成了《熙朝快史》的前七回半。第八回下半开始，插入了新的内容，攻击的是三弊之外的其它社会弊端。韩南先生曾论，“小说的后半部分主要写康济时对甘肃回民叛乱的镇压。1895年，在甘肃的确爆发了一场叛乱，20年来还是第一次。此处的时间巧合非常醒目。叛乱爆发于8月，直到12月上旬中国军队才首次获胜。小说序言注明日期是12月23日，这似乎是小说与时事相交的一个极端的例子。在下一个时期，这种例子屡见不鲜。\*16”朱正初提交的小说，只简单地提到了回民叛乱，但没有《熙朝快史》用四回半的篇幅写得那么详细。加入时事，一方面是对时事的回应，以求呼唤民族英雄，另一方面是写作主体和民族意识的诞生，这两方面对现代文学的产生尤其重要。

（三）珠串。《熙朝快史》已远不止是批判三弊，又激烈地攻击了官场的黑暗，如贪污受贿和办案不公。这方面也是朱正初参赛的原作品所无。《新趣小说》和《新辑熙朝快史》，毫无疑问便是谴责小说的前驱。而《新辑熙朝快史》更是以珠串的形式，兼合了因果报应、奇侠演义、公案传奇、退隐修仙等等元素，既上承传统小说，又下开晚清武侠、公案、谴责等门类小说之先河。珠串的形式，正好将这

些一网打尽。从谴责的内容和珠串的形式看，后来的谴责小说如吴趼人的《二十年目睹之怪现状》等作品，便有类似的倾向。然而，珠串的形象不好的地方也很明显，例如前人曾批评了《熙朝快史》的“艺术较粗糙，结构松散，诸事杂凑，信笔写来，又戛然而止，结局令人有突兀之感。所写人物形象也不够鲜明，缺少动人的细节。\*17”

文本的变化并不止是这方面，此处不更赘述。但是有趣的是，《熙朝外史》第十三回中写芮方垂涎曹氏美色时，描写了“三寸金莲”。“底下元色湖皱百筒裙，裙底金莲不满三寸，穿着一双平金绣花蓝缎网鞋儿。\*18”朱正初在《新趣小说》中多次批判了“缠足”，然而在《熙朝外史》中加入的几章中，却看到了修订者西泠散人对“三寸金莲”的审美观照。文本内前后呼应失榫，再证作者、修订者非一。诚如西泠散人的序言所道，“呜呼，小说岂易言哉？\*19”此序几乎整篇都在大谈特谈写作小说之难。

需要指出的是，《新趣小说》及其修订版《新辑熙朝快史》充分地了交涉到民族主义书写，催生了作者和修改者的主体性，又因为其现代写作技巧的努力探索，才使得这部小说足以堪称为“最早的中国现代小说”\*20。 ㊦

（“时新小说”作者考系列未完待续 ——）

（中山大学中文系博士生，哈佛燕京学社访问研究员）

#### 【注】

- 1) 吴晶著：《百年一缶翁——吴昌硕传》，杭州：浙江人民出版社，2005年，第48页。
- 2) 吴晶，第48页。

- 3) 王季平主编:《吴昌硕和他的故里》,杭州:西泠印社出版社,2004年,第76页。
- 4) 陈兵著:《大写意花鸟画技法研究》,上海:上海人民美术出版社,1989年,第21页。
- 5) 陈兵,第24页。郎绍君等著:《吴昌硕 齐白石 黄宾虹 潘天寿四大家研究》,杭州:浙江美术学院出版社,1992年,第114页。朱、吴交往,现存有不少诗作和信件可为作证。
- 6) 王季平,第76页。
- 7) 吴昌硕著:《缶庐集》,台北:文海出版社,1986年,三首诗分别于诗集的第三页、十三、十六页。
- 8) 吴晶,第49页。
- 9) (日)樽本照雄编:《新编增补清末民初小说目录》,济南:齐鲁书社,2002年,第754页。
- 10) 韩南《新小说前的新小说——傅兰雅的小说竞赛》,见韩南著,徐侠译:《中国近代小说的兴起》上海:上海教育出版社,2010年,第142页。
- 11) 刘永文编:《晚清小说目录》,上海:上海古籍出版社,2008年,第374页。
- 12) 辽宁省图书馆、吉林省图书馆、黑龙江省图书馆主编:《东北地区古籍线装书联合目录》2,辽宁:辽海出版社,2003年,第2034页。章品主编:《中华谜典》,大连:大连理工大学出版社,1999年,第216页。该书出版前有抄本,见马啸天《虚心室藏书目录》,见江更生,朱育珉主编:《中国灯谜辞典》,济南:齐鲁书社,1990年,第443页。
- 13) 程亚林、陈庆浩:《中国古代通俗小说有关书目、论著若干补订》,载《武汉大学学报》(社会科学版),1987年,第4期,第89页。马廉著:《马隅卿小说戏曲论集》,北京:中华书局,2006年,第48页。
- 14) 今人有整理本,见《熙朝快史》,收入梁心清、李伯元等著《中国近代孤本小说集成》第一卷,北京:大众文艺出版社,1999年,第249-289页;又见《熙朝快史》,收入《中国近代孤本小说精品大系》第七卷,呼和浩特市:内蒙古人民出版社,1998年,第447-530页。
- 15) 韩南,第142页。
- 16) 韩南,第144页。
- 17) 刘世德主编:《中国古代小说百科全书》,北京:中国大百科全书出版社,2006年,第599页。
- 18) 梁心清、李伯元等,第284页。
- 19) 梁心清、李伯元等,第249页。
- 20) 韩南,第142页。

### 清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します

姚 達兌 聖書与白話 《聖諭》俗解  
和一種現代白話的天折 『同濟  
大學學報(社会科学版)』2012

年第1期(第23卷總第99期)2012.2

劉 永文 『民国小説目録(1912-1920)』  
上海世紀出版股份有限公司、上海  
古籍出版社2011.12

甘 麗娟 論日本小説觀念の近代轉型  
以《小説神髓》為中心 王曉平  
主編『國際中国文学研究叢刊』第  
1集 上海世紀出版股份有限公司、  
上海古籍出版社2011.12

郝 嵐 《時務報》与福爾摩斯的中国  
式亮相 王曉平主編『國際中国  
文学研究叢刊』第1集 上海世  
紀出版股份有限公司、上海古籍  
出版社2011.12

韓嵩文(MICHAEL HILL) “啓蒙讀本”:  
商務印書館的《伊索寓言》訳本与  
近代文学及出版業 王德威、季  
進主編『文学行旅与世界想像』  
南京·江蘇教育出版社2007.4

陳思和、王德威主編  
『建構中国現代文学多元共生体系的新思考』  
上海·復旦大学出版社有限公司出版2012.1  
2011年8月第1版第1次印刷がある。渡辺浩司氏のご指摘  
慶祝范伯群教授80年誕暨學術生涯60周年

陳思和、王德威「緣起」

1 通俗文学の本体研究

王德威「粉墨中国 性別、表演与国族  
認同」

梅家玲「包天笑与清末民初的教育小説」

許俊雅「日治時期台湾小説の生成与発展」

樽本照雄「李伯元和吳趸人的經濟特科」

陳建華「格里菲斯与中国電影の興起

1920年代通俗文学与電影の整合及其

文化政治」

范伯群「在文学語言古今演变的臨界点  
上」

吳義勤「雅俗共賞：徐訏的遺產」

張 兵「通俗文学的文化定位」

徐德明「感傷“鴛鴦”和“才子”人文  
旧派小説家の風格与人格」

張元卿「還珠樓主論綱」

李 勇「論通俗文学の通俗性」

方 忠「以小説重現歷史 論高陽の歴史小説」

季進、余夏雲「海外漢学界的晚清書写  
以韓南、王德威為個案」

朱志榮「現代通俗文学研究方法論」

王進莊「20世紀一二十年旧派文人の轉型  
和現代性」

陳子平「中国現代通俗文学史研究の再反  
思」

石 娟「20世紀30年代通俗文学商業運作的  
文本選択 以《新聞報》(1929  
-1937)為核心」

李国平「保守主義：現代上海小報文人の  
文化選択 以1920年代的《晶報》  
文人群体為例」

禹 玲「澄清李定夷对《樂人揚珂》の抄  
襲公案」

2 通俗文学与中国近、現代文学之關係 -  
嚴家炎「“五四”文学思潮探源」

范伯群「1921-1923：中国雅俗文壇の“分  
道揚鑣”与“各得其所”」

陳思和「先鋒与常態 現代文学史の兩  
種基本形態」

郭延礼「雅俗之辨与通俗文学の泛化 評  
范伯群教授の兩部《通俗文学史》」

陳国恩「中国現代文学の学科独立与“双

翼”舞動」  
湯哲声「“五四”新文学与“鴛鴦蝴蝶派”  
文学究竟是什麼關係」  
劉祥安「《繡帶銀鏢》与《駱駝祥子》的  
關聯討論」  
李 玲「張恨水《春明外史》的情愛意識  
建構」  
張 蕾「阿英与魯迅、胡適關於晚清小說  
的“對話”」  
馮 鵠「關於中国通俗文学的“泛化”与  
“分期”問題 与郭延礼教授商榷」  
3 范伯群先生學術思想研究  
陳思和「范伯群教授的新追求和新貢獻」  
徐斯年「從“史觀”到“体制” 讀  
《中国現代通俗文学史(挿図本)》」  
樂梅健「為了生態平衡的文学家園 范  
伯群的通俗文学研究述評」  
袁勇麟、陳舒劼「通俗的意義 評范伯  
群著《多元共生的中国文学的現代化  
歷程》」  
楊洪承「史家心態与文学史理論之建構  
兼談范伯群《中国現代通俗文学史  
(挿図本)》的學術意義」  
傅光明「范師風范 兼談文学如何“史”  
之淺見」  
馮 鵠「填平鴻溝 開疆拓土 評范伯  
群教授學術研究的開創性歷程」  
張濤甫「漸進、協商的文学史“革命”」  
章俊弟、范伯群「《中国近現代通俗文学  
史》艱難成書」  
蔡小容「長篇小說体的文学史 《中国  
現代通俗文学史(挿図本)》賞析」  
張 蕾「論多元共生新体系成型的歷程  
范伯群教授对中国現代文学史“史  
識”的新突破」

李 楠「願生命与學術之樹常青(代編後  
記)」

『中国現代文学研究叢刊』

2011年第12期(總第149期)2011.12.15

《東方雜誌》早期編輯者考辨……周新順

『中国現代文学研究叢刊』

2012年第1期(總第150期)2012.1.15

重審五四時期《新青年》雜誌上的旧戲論争  
……張 鑫

【書評】從文類視角看現代“文学”的構  
造 讀張麗華《現代中国“短篇小  
說”的興起 以文類形構為視角》

……季劍青

『中国現代文学研究叢刊』

2012年第3期(總第152期)2011.11.15

南社等革命党人的北京想像与書写

……季劍青

修辭的意味：晚清政治小說中的“寓言”  
和“演說”

……魏朝勇

重審沈雁冰批評鴛鴦蝴蝶派的意義

……謝曉霞

『中国現代文学研究叢刊』

2012年第4期(總第153期)2012.4.15

向愷然的“現代武侠奇話語”……徐斯年  
周瘦鵑《申報·自由談》上的時評雜感

……黃 誠

『中国現代文学研究叢刊』

2012年第5期(總第154期)2012.5.15

新文学何以為“新” 兼談新文学的開  
端

……劉 納

晚清小報的新体散文 近代散文新变之  
探索

……何宏玲

清末民初“女性”觀念的建構……宋少鵬